

楽曲紹介

解説=広瀬大介

6/14 | 6/16

6/14

6/16

ベートーヴェン(1770-1827)

交響曲第6番 へ長調 Op. 68『田園』

長いヨーロッパ音楽の歴史を見渡してみれば、自然界にあるものを直接描写する広い意味での「標題音楽」は、古典派の時代にはいったん下火になっていた。ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770-1827)は、師と仰いだヨーゼフ・ハイドンの2曲のオラトリオ、『天地創造』(1798年)と『四季』(1801年)の価値は評価していたものの、その自然描写的要素については「質が低い」とみなしていた。そのためかどうか、1807年からおよそ1年間をかけて作曲された6曲目の交響曲に、ベートーヴェンは自ら『田園』という副題をつけながらも、そこにあるのは「絵画的描写ではなく感情の表出」であり、「音による絵画は、器楽での表現が行き過ぎるとすぐにだめになってしまう」と、言葉を尽くして説明し続けることになる。

実際、同時期に作曲された『第5番』とこの『第6番・田園』には多くの共通点がある。ピッコロやトロンボーンが加えられ、スケルツォ楽章と最終楽章は切れ目なしに連続して演奏されるなど、『田園』はそれまでのベートーヴェンの「革新性」を多く受け継いでもいる。第1楽章「田舎に到着したときの愉快的な感情の目覚め」では、冒頭4小節で提示される主題が全曲にわたって有機的に(かたちを変えながら)用いられる。これは、『第5番』の有名な冒頭の旋律が提示される様とそっくりである。第2楽章「小川のほとりの情景」では、ヴァイオリンが小鳥の鳴き声や小川のせせらぎを旋律の形で描く一方で、曲の最後でははっきりとフルートがナイチンゲールの、クラリネットがカッコウの鳴き声を模倣する。それまでの交響曲におけるスケルツォ楽章は、この曲では第3楽章「田舎の人々の楽しい集い」という舞曲、そして最終楽章への橋渡しとなる激烈な第4楽章「雷雨・嵐」に分けられ、最後の3つの楽章は休みなく演奏される。第4楽章では、特

殊な打楽器などを用いずに嵐の様子をこの上なく効果的に描くヴァイオリンの用法に、ベートーヴェンの円熟した作曲技法が窺える。第5楽章「牧歌・嵐の後の喜ばしい感謝の気持ち」には、元々は「神への感謝」という副題がつけられており、ベートーヴェンが他の曲でもふんだんに用いた宗教的な意味合いを持つ動機によって構成されている。

【作曲年代】 1808年 【初演】 1808年12月22日 ウィーンのアン・デア・ウィーン劇場にて。作曲家自身の指揮による

【楽器編成】 ピッコロ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン2、ティンパニ、弦楽5部

マーラー (1860-1911)

大地の歌

指揮者として功成名を遂げたグスタフ・マーラー (1860-1911) は、1907年にウィーン国立歌劇場を辞し、翌08年1月、ニューヨーク・メトロポリタン歌劇場にデビューを果たす。この夏には南チロルのトプラッハ (現在はイタリア領、ドブブアーコ) を訪れ、『大地の歌』の作曲に勤しんだ。自身は結局この曲の実演を聴くことはできず、1911年11月、ミュンヘンにてブルーノ・ワルター の指揮によって初演されている。

この作品には、主にアルマ・マーラーの脚色による『第九』を作曲することは不吉なため、題名を『大地の歌』に替えた」というエピソードが独り歩きしているが、マーラーが積極的に作曲してきた、交響曲・交響詩・歌曲の混合形態の頂点に位置するこの曲集を、単純に『交響曲』と名付けなかったのは当然であろう。

詞の成立についても状況は錯綜しているが、エルヴェド・サン＝ドニ訳『唐時代の詩』(1862)、ジュディット・ゴートイエ訳『翡翠の書』(1867)といったフランス語から、ハンス・ハイルマンがドイツ語へ訳した『中国抒情詩集』(1905)が成立し、さらにハンス・ベートゲが翻案を施した『中国の笛』(1907)をマーラーが手にした、という順を辿る。第2楽章の題材だけが不明とされるが、第1楽章、第3～5楽章は李白、第6楽章は孟浩然と王維の詩を訳したものとされる。最初の

5つの楽章が比較的管弦楽伴奏付きの歌曲として解釈しうる規模に収まっているのに比べ、第6楽章「告别」だけが30分近い演奏時間を有している。他の楽章がソナタ形式（第1楽章）や純粋な三部形式（第4楽章）などわかりやすいかたちをとっているのに対し、第6楽章はマーラー自身が歌詞に大幅に手を加え、長い間奏を導入した。形式的には3つの部分とそれぞれの変奏、終結部と解釈できるだろう。最後は二度の下行を伴う、いわゆる「ため息の動機」によって「永遠に…」の言葉と共に閉じられ、天上の世界を表現するチェレスタがその風景を彩る。

【作曲年代】1908年 【初演】1911年11月20日 ミュンヘンにて。ブルーノ・ワルター指揮、カイル管弦楽団による

【歌詞】ハンス・ベートゲ編訳「中国の笛」より

【楽器編成】ピッコロ、フルート3（3番はピッコロ持ち替え）、オーボエ3（3番はイングリッシュホルン持ち替え）、エス〔Eb〕・クラリネット、クラリネット3、バス・クラリネット、ファゴット3（3番はコントラファゴット持ち替え）、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（タンブリン、大太鼓、トライアングル、シンバル、タムタム、グロッケンシュピール）、マンドリン、ハープ2、チェレスタ、弦楽5部、テノール独唱、メゾソプラノ独唱

ひろせ・だいすけ（音楽学・音楽評論家）／1973年生まれ。青山学院大学教授。日本リヒャルト・シュトラウス協会常務理事・事務局長。著書に『リヒャルト・シュトラウス 自画像としてのオペラ』（アルテスパブリッシング、2009年）等。「レコード芸術」誌等での評論のほか、演奏会曲目解説、オペラ公演・映像の字幕対訳等への寄稿多数。